View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Waseda University Repository

博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	黒岩　卓
論　文　題　目	Composer, jouer et diffuser les «parolles polies» - contribution à l ' étude de la versification des sotties – （『「磨かれた言葉」の構築・上演・伝播 ―ソチ諸作品における詩作技巧の研究のために―』）

審査要旨

1. 主題と構成

本論文は，15－16世紀における，フランス中世末期の演劇作品のなかでも重要な位置を占めるソチ（阿呆劇）について，その現存する全16作品を対象にして，笑劇（ファルス）として著名な『ピエール・パトラン先生』の複数の写本・印刷本とも比較しつつ，それらの詩作上の技巧を詳細に検討したものである。付録として，第2巻には，この全16作品の，分析の対象としたソチのテクストの転写を収録している。これは，既存の校訂版によらずに，黒岩氏自身による句読点などもそのまま再現したもので，校訂者のEmile Picot, Eugénie Droz らによる従来のテクスト本文との相違，またその後の諸研究者による読みとの違いも，校異として下段に示してある。なお論文自体はフランス語による。

2. 本論文の概要

序論においては，当時としては例外的に多くの写本・印刷本をもつ笑劇（ファルス）『ピエール・パトラン先生』のなかから，詩作技巧にばらつきはあるが脚韻は安定しているラ・ヴァリエール写本，明らかに読書用のテクストとなっているルヴェ本とガリオ・デュ・プレ本，そして誤植や詩行の欠落の目立つトレプレル本を比較検討し，不規則な詩行の少ないということが必ずしも作品のオリジナル（作者による原作）との親近性を示すものではなく，むしろ上演のために書かれたテクストのほうが読書用の韻文作品として改作・修正された可能性の高いことを示唆する。

第一部では，詩作技巧と，作品が伝播するさいの媒体，そして政治的言説との相関関係を探る。現存のコーパスの大部分をしめす「備忘録版」forma agenda と称される版にはとくに音綴数のうえで不規則な詩行が見られる。これにたいして読書用の写本などでは，孤立詩行や音綴数の乱れがほとんど存在しない。読書用であった『年代記作者のソチ』などには印刷される過程で相当の修正が加えられたものと考えられる。これらのテクストは当時のフランス王を顕揚する態度が鮮明であることと比較すると，上演用の「備忘録版」諸作品ではその傾向が薄い。ソチの書籍としての流通の方法と，政治的な言説の有無，そして詩作技巧の首尾一貫性という3つの要素のあいだには，明らかに相関関係を見て取ることが可能であるとする。

第2部では，不規則な詩行とドラマトゥルギーについて考察を加える。「備忘録版」の不規則な詩行には，それではいかなる意味があるのかと問い，網羅的にそれらの部分を調査したところ，すくなくとも半数の場合において，叫び声や罵倒，ラテン語の引用，補足的なコメントに該当していることがわかった。その内容の本文との隔たりのゆえに，通常の発話にはおさまりきらない感情を表現するのにこれらの不規則詩行が大きな役割を果たしていたとみなす。結果的に不規則詩行の意図的な利用は，例外的な現象ではなく，演劇上演に即した，広く認められた慣習だったのではないかと結論する。

第3部では，14世紀以降16世紀までの，韻文マニュアル（詩法書）を詳細に検討し，作品構築の原理を探る。ソチ全作品の脚韻の構成を，①平韻(monorime)どうしによる場合，②特定の脚韻の echo（反響）が離れて存在する場合，③まったくの断絶(rupture)という3つの型に分けてじっさいに検討している。また，この作業をおこなうにあたり，オランダの研究者 Wilhem Noomen による”vers ajoint”の概念を導入している。けっきょく，③のまったくの断絶の場合というのは，全コーパスのなかで13箇所にとどまることがわかった。当時の詩法書には見出すことのできない詩形が多数存在しており，ソチ作品内部でのリズム区分が臨機応変におこなわれていたことを実例を多数指摘して実証している。

全体的な結論として，ソチの場合，既存の詩作技巧の体系（詩法書などに規定されている，抒情詩をもとにしたもの）に適合する詩法は，ソチが読書用の書物として流布されるにしたがって増すのであり，演劇上演のじっさいにおいては，不規則であったり，定義の困難な詩形が許容され，また活用されていた。したがって演劇テクストとしての詩作技巧の不規則性を，作者や写字生，印刷業者の怠慢に帰してはならず，独自の意義をそれにあたえてしかるべきだろうとする。

第一巻には付編(annexes)として，5つの章が設けられている。いずれも詳しい分析であり，本論の理解に資するところが大きい。

(1) 14－16世紀の詩法書における，詩形の諸要素についての記述のまとめ

(2) 詩形の「不規則性」の問題について（特殊な場合の考察）

(3) コーパスとした全作品中における不規則な詩行のリスト

(4) 詩法，とくに脚韻の形式を，作品のなかからいかにとりだすのかについての見解

(5) コーパスとした各作品中のすべての詩法のシェマ（形式）の一覧

3．評価

原作，上演，伝播という各段階において，これらの技巧がいかに定式化され，またいかに不規則詩行が生じるかを詳細に分析しながら，写本から印刷本へと支持素材が変化してゆく時代にあって，脚韻や音綴数や詩形における不規則性が，テクストを上演し理解する上で，じつは必ずしも問題をひきおこす部分ではないという事実を，きまめて細かいテクストの読みから論証している。読書用のテクストにみられる音綴数および脚韻の首尾一貫性は，上演用のテクストとは別の次元でとらえられるべきであり，後者は変則的な詩形や定義の困難な不規則詩行が許容され，活用されていたことを，内容の上からも立証したのは，20世紀前半の文献学者による従来の研究からでは不可能であった視点を，本論文で黒岩氏が導入したからにほかならない。

審査のさいには，以下のような指摘が各審査委員よりなされた。

1) 若干の用語の定義の不明確さ（couplet, fatiste など）

2) 本論第一巻の最後に，付篇(annexes)として，本文の論述を進めるための基礎理論が述べられるが，これは本文のなかに組み込むべきではなかっただろうか。

3) すべてのテクストの詩法を，脚韻の型から各詩行の音綴数まで数え上げてあるのは，たいへんな作業ではあるが，脚韻の型をこまかく設定しすぎた（aabb が基本単位）ため，かえって「不規則」な詩行を増やした可能性もある。作品の内容（意味）をより踏まえて，より適切な切りかたがありえたのではないか。

4) たんなる誤植(coquilles)と，不規則性の境界がやや曖昧である。

5) 第2巻のテクストの転写における先行研究者の読みの指摘（校異）は，たんなる羅列に終わっている部分があり，より整理した形での提示が望まれるし，黒岩氏自身の解釈による読みも必要なのではなかったか。

6) ソチという，ほんらいは演劇テクストであったはずのものには，テクスト上ではうかがい知ることのできない，パーフォーマンス性，つまり役者によるその場での即興の部分がどうしても残るであろう。すべてを詩形から解決しようとすることは，黒岩氏自身も認めているように不可能なのかもしれない。

とはいえこうした指摘により明らかにされた問題点は，本論文の論旨と分析の結果を大きく変えるものではない。日本ではまったく先行研究がなく，欧米においても研究者の少ない中世後期の演劇という分野において，演劇によるパーフォーマンス性を考慮にいれるという新しい視点から，実証的にソチのテクストの特殊性を明示しえた事実は，本研究をきわめて意欲的かつ重要なものにしている。この分野での基礎的な研究として資するところが大きいと判定できる。また，すべての作品を既存の校定本のみによらずに，当時の写本・印刷本を直接に所蔵図書館におもむいて転写した上で，それを付録として第2巻に提示し，堅固な立証をおこなうことにも成功しており，審査委員会は全員一致で博士論文にふさわしいものと判断した。

公開審査会開催日	２００９年９月２９日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏　名
主任審査委員	早稲田大学教授	文学博士	瀬戸直彦
審査委員	早稲田大学教授		Odile DUSSUD
審査委員	白百合女子大学教授		篠田勝英
審査委員	東京大学准教授	文学博士	松村　剛